

水俣学通信

第 20 号
2010.6.1

Newsletter from the Open Research Center for Minamata Studies



カナダグラスシーナロウズ 2010年3月 (写真 水俣学研究センター)

目 次

論説： 水俣病患者に対する新たな「救済」 について……………	2	新日窒労組旧蔵資料データベースを ネットに公開 5月 新しいデータ を追加……………	6
	丸山定巳	刊行物紹介： 熊本学園大学・水俣学ブックレット No. 8 発刊……………	7
報告： カナダ水銀汚染地区先住民調査 ……………	3	こぼれ話： 東海道新井の宿の中毒事件……………	7
	田尻雅美	新規採択研究費・水俣学研究センター 日録……………	8
水俣病公式確認 5月1日……………	4		
	川辺将之		
水俣：春の季節の学び……………	5		
	バンペン・チャイヤラク		

《論説》

水俣病患者に対する新たな「救済」について

社会福祉学部教授
(水俣学研究センター研究員) 丸山 定 巳



この5月1日から、「水俣病被害者の救済及び水俣病問題の解決に関する特別措置法」に基づく「救済」手続きが開始された。

最終解決のはずだった1995年以降、とりわけ関西訴訟の最高裁判決後の2005年頃から急増した認定申請者に対して、行政は公健法に基づく検診・審査を回避するため、比較的簡単な手続きで交付する保健手帳制度を新たに設け対処してきた。現在、この受給者を含めて新たに名乗り出た患者は3万人以上に上っている。

5年前、新規に名乗り出た人たちを対象に調査を実施したことがある。申請のきっかけとしては、「水俣病とは知らなかった」という回答が最も多かった。自分の身体の不具合が汚染魚と結びついていなかったのである。次いで多かったのが、差別等の「しがらみが弱くなった」という理由があげられていた。このような状況は、今も続いている。それに加えて、今時の新しい動向としては、これらの中に胎児性世代が少なからず含まれているということである。

これから始まる「救済」は、これらの患者たちに、いわば第2の政治解決によって現在の紛争状態を解消しようとするものである。210万円の一時的金付きを申請するか、療養費のみ支給される「水俣病患者手帳」のいずれにするか、現地では不安もみられるという。

「救済」対象者には、認定基準のような複数症状等の要件は課されず、しかも第三者的な判定検討会で結論を出すという95年の際にはなかった手法が講じられている。しかし、この機関が実際にどのように機能するかはこれからである。それに、対象者の範囲については、地域や時期に関して、未だ実態にそぐわない制約が加えられている。

「対象地域」としては、熊本県では上天草市や鹿児島県出水市の一部が新たに追加されたが、水俣市や芦北町の山間部は今回も除外されている。しかし、汚染魚が流通した地域的範囲は、不知火海沿岸部に止まらずその後背地はもとより遠く山間地にまで及んでいた。それぞれ山奥にいたるまで定常的な行商ルートがあった。汚染魚が出回った1950年代から60年代の時期は、今日のように広域的な流通システムは発達していな

かったから、不知火海の魚介類は、まさに「地産地消」の世界にあったといえるが、そうした想像力が欠如している。

また、対象者の出生時期は原則1969年11月末までとしているが、最近公表された国立水俣病総合研究センターの不知火海沿岸「へその緒のメチル水銀濃度」でも、少なくとも1970年代前半までは、高濃度の汚染が続いていたことを示しており、時期の線引きにも問題があることがあらためて明らかになってきている。

加害者の立場にある国県行政が「救済」という言葉を使うのには、以前から違和感を覚えてきた。本来「償い・補償」であるべきだ。水俣病に対する自らの責任を受け止めたくない行政の姿勢がこんなところにも現れている。特措法は、3年を目途に「救済」を完了することになっているが目論み通り進むか未知数である。いずれにしても、汚染被害の全容が不明のままでは、「救済」の目処はつけられない。今時の対策の中にも、水俣病の調査研究が挙げられてはいるが、中身はあくまでも名乗り出てきた患者へのフォローアップに止まっており、潜在患者の発掘に繋がる抜本的な全容解明を目指す方策にはなっていない。このままでは、「救済」も終わりようがないのではないだろうか。



《報告》

カナダ水銀汚染地区先住民調査

水俣学研究センター研究助手 田尻雅美

水俣学研究センター前センター長、原田正純が中心となって、カナダオンタリオ州の先住民居留地グラッシーナロウズとホワイトドッグで発生した水俣病被害調査を2010年3月23日から3月30日の日程で行った。またケノラ市では、これまでの調査について原田が報告し、大類氏が製作した映画「The Scars of Mercury (水銀の傷跡)」上映などの報告集会を行った。水俣学研究センターからは、センター長の花田、研究助手の井上・田尻(看護師)が参加した。その他、居留地での医学的調査には、診察希望者が多数訪れることも予想できたため、原田の呼び掛けで、藤野医師、堀田医師、上田医師、高岡医師が、また、分析技術者である廣中氏もボランティアで参加してくださり、取材スタッフ(熊本県民テレビクルー)2人、原田夫人を加え、総勢12人が熊本から居留地へ向かった。



ケノラでの報告集会

カナダでは、ウィニペグ在住の大類義氏(記録映画作家)が現地通訳スタッフ、居留地との連絡なども含め、コーディネートを勤めてくださった。大類氏は、カナダ先住民の水俣病事件の支援と記録映画を製作しており、2004年の水俣学プロジェクトでのカナダ調査にも同行、2006年に開催した国際フォーラムでもカナダ先住民のサポーターとして協力いただいている。カナダでは大類氏の他に、在カナダ日本人のヨシコ・ケントさん、中谷内知子さん、中島民樹さんが通訳として、また、国際フォーラムにも参加してくださったThor Aitkenhead氏がドライバー兼通訳者として、Patrick Macklemさんがドライバーとして参加してくださり、調査チームは18人となった。

2005年調査から5年ぶりであったが、日本と違い、グラッシーナロウズ、ホワイトドッグとも居留地の町なみに変わりはなかった。さらに、変わりがなかった

のは、検診希望者が多数であったことだ。開始時刻には既に10人近くが待っておられ、何時になっても、途切れることがなかった。居留地には、医師が常駐していないため、健康に不安を持っている住民が多数おり、特に子どもの健康相談が多かった。最終的には、グラッシーナロウズ90人、ケノラで3人、ホワイトドッグで108人の検診を行った。詳細な結果のまとめは、これからになるが、水銀の影響による症状がある方々が多数いることに間違いはなかった。



ホワイトドッグでの診察会場

2005年に調査で受診し、今回も調査に協力して下さった方々がいたが、加齢現象が速いのではないかとの印象を持った。また、日本での水銀汚染地域での調査でも感じるのだが、非汚染地区での検診に比べ、検査や聞き取りに時間を要すると感じた。数字やデータとして表現できないことなのだが、同じ検査をしても、水俣病汚染地区では8時間の調査で15人調査するのがやっとだとしたら、非汚染地区では5時間で15人の調査が終わるといった差が出る。このような違いは、現場で実際に調査にかかわらないと知ることはできない。だからこそ、日本の水俣病の問題を解決しようと思うなら、現地での調査が必要なのだ。

居留地は大きな湖に囲まれ、自然豊かな地域で、商店は1軒あるだけで、日本のコンビニエンスストア程度の大きさで日用品・食料品などが売ってある。このようなところで生活しているのだから、湖から獲れる魚や猟でとったものを食べるのが当然である。そして、原田が、カナダの居留地では冬場は湖は凍り漁ができないので毛髪水銀値が低いと報告しているように、今回訪れた居留地の湖は一面凍っており、自然の厳しさを感じた。

《報告》

水俣病公式確認5月1日

熊本学園大学大学院福祉環境学研究所
(水俣学研究センター特別研究員)

川 辺 将 之



2010年5月1日、今年も水俣病被害者や支援者らによる慰霊祭が乙女塚でおこなわれた。青空のもと一次訴訟原告らがつくる水俣病互助会や、第2世代訴訟の原告らがつくる水俣病被害者互助会の会員らが、つぎつぎと焼香していった。一方、親水護岸では水俣市主催の慰霊式が盛大におこなわれていた。加害者の長達は「祈りの言葉」のなかで特措法による救済が始まることを宣言した。いよいよ水俣病が解決するという雰囲気が出た。いよいよ水俣病が解決するという雰囲気が随所に出ていた親水護岸の慰霊式と、遠くなった解決にむけて静けさの中に穏やかならぬ雰囲気漂う乙女塚の慰霊祭はとでも対照的であった。

乙女塚は、一人芝居「乙女塚勸進行脚」をおこなった砂田明氏が、水俣病の犠牲になったすべての生類の霊を祀るために、田上義春氏が補償金によってひらいた農園のなかで不知火海をいれてもっとも眺望のすぐれた場所に1981年に建立された塚である。乙女塚は、認定というふるいわけに関わりなく、水俣病の犠牲となったものすべてを祀っている。今年も、経が読まれるなか参加者ひとりひとりが、静かに塚の前で手を合わせていった。



乙女塚での慰霊祭

同じ頃、水俣市が主催する慰霊式が親水護岸でおこなわれていた。今年、鳩山首相が歴代首相ではじめて慰霊式に出席した。また、それに合わせる形で昨年成立した水俣病特別措置法による救済の申請が開始された。公式確認から54年をむかえ、水俣病は最終解決にむけて大きく前進したという雰囲気にみちていた。慰霊式では、加害者である国、県、チッソの長達によって「祈りの言葉」が朗読された。鳩山首相は国のトップとして被害の拡大を防がなかった責任を謝罪し、「責任を持って被害者の方々への償いを全うしなければならない」とし、「水俣病被害者を迅速かつ、あとう限りすべて救済します」と誓った。

この日の夜、熊本市の県民交流館パレアでは「国家の病、水俣病の今」と題した講演会があった。講師は、国会で政府に対して水俣病問題を追及してきた元衆議

院議員の馬場昇氏と、医師という立場から患者にかかわってこられた原田正純氏であった。両氏は、それぞれ違う立場から長年水俣病問題に取り組んで来られたが、異口同音に「水俣病の解決はこれからである」と、今回の救済策では水俣病は解決しえないと語った。講演会の最後には、胎児・小児性世代の問題を提起して裁判をしている水俣病被害者互助会会長の佐藤英樹氏より、「加害者責任をあいまいにしたまま解決を図ろうとする国、県、チッソに、被害者と認めさせて、そのなかで補償するようこれからも裁判で闘っていきます」との挨拶があった。



熊本パレアでの集会

私は、今年で4回目の5月1日をむかえた。まだまだ新参者ではあるが、被害者と加害者の間にある溝が年々深くなっていると感じる。しかも、その溝は加害者によって深くされている。被害者を被害者とせず、水俣病問題を有耶無耶にして終わらせようとする加害者と、加害者に被害者であることを認めさせるために闘う被害者。この構図は、水俣病の歴史を通して変わることがなかった。そしてまた、偽りの終結が加害者によっておこなわれようとしている。加害者の代表である鳩山首相は、先述の祈りの言葉では「あとう限りすべてを救済します」と誓う一方、現在おこなわれている裁判では例外なく被害者を被害者として認めていない。このような加害者の矛盾した姿勢が水俣病問題の溝を深くする原因となっている。この溝をなくすためには、蒲島熊本県知事が祈りの言葉で語ったように「水俣病問題と真摯に向き合う」必要がある。被害者の声に耳を傾け、現実存在する被害を受け入れないことには、なにもはじまらないであろう。乙女塚の慰霊祭に参加して、しめやかにおこなわれた慰霊祭と、首相の出席に沸く慰霊式との対照的な姿が、水俣病問題に刻まれた溝の深さを表しているように思われた。

《報告》

水俣：春の季節の学び

Minamata: a learning in the spring time

水俣学研究センター客員研究員 バンペン・チャイヤラク
(Bampen Chaiyarak)



私の名前はバンペン・チャイヤラクといいます。現在、タイ・バンコクのシリパコーン大学 (Silapakorn University) で、考古学部人文科学科 (人類学) の修士課程に在籍する大学院生です。また、タイのウドンタイ (Udonthai) に拠点を

置く地域市民社会団体であるエコカルチャー・スタディ・グループ (Eco-Culture Study Group) で活動しています。

最近、日本財団アジア・フェローシップ (Asian Public Intellectuals; API) の2009-2010年の奨学金制度により、特別研究員として「鉱山開発と地域社会の現状」というタイトルで調査を行っています。この制度により、熊本学園大学・水俣学研究センターへ客員研究員として来ました。

3月1日から7月31日までの5ヶ月間、日本に滞在し、水俣病事件、土呂久の砒素汚染、足尾鉍毒事件、イタイイタイ病について調査をし、また数か所の集落を訪問し、公害、特に鉍業や産業が地域社会へ及ぼした多大な影響や社会変化を調査する予定です。

水俣に来る前の私の認識は、水俣は悲しみの都市というものでした。それが動機となって、日本が世界の近代産業を牽引する国となる前に、公害により水俣や他の地域社会に何が起きたのか、日本に来て学びたいと思いました。水俣に到着したとき、早春の美しい自然にふれ、大変うれしく思いました。水俣川の流れに沿って、薄いピンクの桜の花が徐々に咲き始めていま



水俣川の桜

した。山からの湧水がいくつもの小さな流れを作り、それが支流となり、やがて水俣川となって不知火海 (神秘の火の海の意) へとつながっていきます。

水俣での学びの体験は、公害によって人々を襲った悲劇に私の心は悲しみを感じながらも、山と海に包まれた貴重なひとときでした。

日本の他の地域も訪問するため、水俣での滞在期間は1ヶ月しかありませんでした。しかし、熊本学園大学水俣学研究センターのご協力とたくさんの地域住民の方々のご親切により、多くのことを学びました。特に、何人もの水俣病患者の方々は、病気の体にもかかわらず、強い魂と力強さで、私に偉大な精神的経験を与えてくれました。

水俣滞在中、私は山村や無農薬畑、漁村にも行くことができました。また、水俣病で苦しむ多くの患者さんともお会いしました。この病気は、水俣や周辺地区で何千人もの人々が亡くなった水銀汚染による病気です。50年以上たった今でも、多くの人々がこの病気で苦しんでいます。その痛みと悲しみは、水俣市を工業開発中心から農業や漁業を大切にす都市へと転換させるきっかけとなりました。



無農薬の甘夏畑を手伝う

水俣の人々は現在、環境への意識が高くなっています。私が見た今日の水俣は、とてもきれいで穏やかなまちです。水俣は環境首都コンテストで高い評価を受ける、環境に配慮するまちとなっています。日本における最高の環境マネジメント都市です。

《報告》

新日本窒素労働組合旧蔵資料データベースをネットに公開 5月 新しいデータを追加

福祉環境学科長(水俣学研究センター研究員) 山本尚友

昨年の11月20日からインターネット上に「新日本窒素労働組合旧蔵資料データベース」が公開されている。「新日本窒素労働組合旧蔵資料」は、同組合の解散にともなって2005年(平成17)に水俣学研究センターに移管された資料で、元組合員を中心に整理を進め、2009年(平成21)3月に『新日本窒素労働組合旧蔵資料目録』(403ページ)を刊行、2010年1月から水俣学現地研究センターで公開を始めた。

この組合は、1968年(昭和41)8月30日の組合定期大会で、公害発生企業の労働者として「何もしなかったことを恥とし、水俣病と闘う」という著名な「恥宣言」を採択し、水俣病患者支援を打ち出したことで有名である。この組合の資料の特色は、戦後直後の結成から2005年の解散時までの資料がほぼ完全な形で残されていることである。組合は活動の中で生まれた資料を保存し、さらに登記書類や会社との協定書等の基本的な書類を金庫に厳重に保管するなどして、組合結成時から解散までの基本資料がほぼ切れ目なく残存することができたのである。

水俣学研究センターでは、組合資料の整理が終わったあと引き続き、同組合資料のデータベース化に取り組んだ。資料整理では、1点として登録された簿冊は、その中に多くの資料が含まれており、簿冊のなかの資料を1点ごとにデータ化することにしたのである。幸い、文科省のデータベース科研の交付を受けることができ、2009年7月から常時3人体制でデータベース化の作業を進めた。

資料整理で付された資料番号を「登録番号」とし、登録番号を付した簿冊に含まれる資料に「細目番号」を付し、さらに「細目番号」を付した資料に含まれる資料に「目次番号」を付すという原則で作業は進められた。このようにして、各データは「登録番号」と「細目番号」の組み合わせ、あるいは「登録番号」と「細目番号」と「目次番号」の組み合わせで表わせるようになる。

このようにして作成したデータを5月5日よりネット上に追加した。追加された総データ数は8,642点である。公開時のデータ6,225点とあわせて、14,867点が公開にふされたことになる。追加されたデータは、登録番号1~139番(但し7, 12, 34, 36, 40, 49, 117, 130を除く)の資料から、細目番号データ7,333点、目次番号

データ1,309点を作成したものである。

このデータベースは、水俣学研究センターのホームページにバナーが置かれている。ホームページの左下にある「新日本窒素労働組合旧蔵資料データベース」というバナーをクリックすると、データベースの表紙に飛ぶ。表紙には上段に「検索画面」があり、下段に「利用の手引」等の関連ファイルが置かれている。「検索画面」の下に「詳細検索」のバナーがあり、詳細検索では資料番号やキーワード、作成年等での検索が行える。



試しに「キーワード」に「水俣」と入れると、簡易表示画面が現れ「水俣」のキーワードに関連する「7,045」件のデータの内の20データが表示される。最初のデータは「1 1-5 第2回係代表者会議事録 日窒水俣労組 1946.1.9」となっていて、これは「Seq. 番号 表題 作成者 作成年」を表わしている。試しに番号の「1」をクリックすると、「登録番号1」の簿冊の詳細表示が現れる。番号「5」をクリックすると、「1-5」のデータの詳細表示が現れる、というようになっている。

一度、時間がある時にデータベースを使っていたきたい。このデータベースは、ほぼ毎日のペースでなんらかのデータが登録されており、日々の組合活動の動きを時には時間単位で知ることができる。このような経験はなかなか出来るものではないと思う。

水俣学現地研究センター

開館時間：火~金曜日 10:00~12:30、13:30~16:00
休館日：月・土・日曜日、祝日、熊本学園大学の定める日、書籍点検のための休日

利用の案内は、「新日本窒素労働組合旧蔵資料データベース」内にあります。

新日本窒素労働組合
旧蔵資料データベース



《刊行物紹介》

熊本学園大学・水俣学ブックレット No. 8 「失敗の教訓を活かす～持続可能な水俣・芦北地域の再構築～」発刊

水俣学現地研究センター長 宮北隆志

熊本学園大学の水俣学研究センターは、2005年4月、人類の「遺産」としての水俣病事件の全体像解明をベースに新たな学問分野とその方法論を開拓する、「水俣学」の推進拠点として設立されました。この5年間、水俣市浜町に同年8月に開設した水俣学現地研究センターを最大限に活用し、現場に根ざし全ての成果を地域に還元することを基本として、地域の方々と共に、研究と教育の両面から様々な活動を展開してきました。

本書では、水俣・芦北地域における地域再生モデルの提案(プロジェクト2)として地域の多様な関係者・関係機関との連携・協働で取り組んできた、これからの水俣・芦北地域50年のあり方に関わる議論や実践活動を中心に紹介しています。

水俣病事件は、チツソが犯した企業犯罪であると同時に、私たち人間が自然との付き合い方において過ち

を犯した結果でもあります。環境被害と長年向き合ってきた水俣・芦北地域の生活者に、また、私たちに、いまなお終わることのない水俣病事件の経験を将来に活かすために何が求められているのかを、この地域が今置かれている現実につけながら考えていくことの必要性を強く感じています。

水俣病未認定患者の救済措置と原因企業チツソの分社化からなる特別措置法が、昨年7月の国会で成立しましたが、被害者に対する恒久的な補償や生活支援のあり方については、いまだ不透明な状況が続いています。また、今年3月には、水俣病患者有志ら16人(7団体)が、この措置法が「被害者の人権を侵害している」として日弁連に救済の申し立てを行っています。このような現実に向き合いながらも、水俣・芦北地域のこれからの50年のあり様について、議論し行動することが求められているというのが本書の出発点です。

《こぼれ話》

東海道新井の宿の中毒事件



浜名湖の西岸に、新居の宿という関所があった。東海道五十三次の上り唄に「浜松の、木陰で舞坂まくり上げ、こちや渡舟(わたし)に乗るのは新井宿」と謡われている。江戸時代の初期に東海道に設けられた関所で、東海道で唯一、海の関所で今切の渡しを渡る、入鉄砲に出女の取り締まりの要所。この関所跡は明治期に小学校として用いられ、建物が現存しており文化財に指定されている。昔から住民達は、浜名湖の自然の恵みを得て暮らしており、江戸時代から春の潮干狩りのアサリ取りは風物詩に数えられた。

ところが1942(昭和17)年3月半ばから、浜名湖西岸で原因不明の奇病が発生し、のちにアサリ貝中毒事件と言われた。地元新聞は「現在までに既に死亡した三十余名の病状はいずれも発熱をもよおし激烈な苦悶を起しコーヒーに似た液体を嘔吐した身体全身に紫色の斑点を生じ病気発生後一二日乃至一二日間位で物凄い苦悶の後、死亡。・・・加藤博士(保健所長)は疫病のような症状もみられるが調べてみると全然異なり

一度も接したことのない病気である。」と伝えている。同月25日には死者が9名に上り翌日にはさらに6名が死亡。27日には地元巡査が聞き取りをしたところ、発病した患者はいずれもアサリ貝を食べて発症していることを突き止め、28日浜松保健所が現場に急行し、アサリ食中毒との確証を得た。そこで新居警察署は、病気の発生した浜名湖第三鉄橋付近新居町弁天海岸八兵衛瀬でのアサリ貝採取を直ちに禁止。結局、4月9日に集計された中毒患者334名、死者112名を数える中毒事件であった。

戦前であるから、内務省管轄で、警察が乗り出して、あさが原因だろうと推定された段階で、貝毒が何であったのかが確定しなくとも、まず摂食禁止措置を取ったのであった。発生原因は呉羽紡績新居工場が疑われたが、軍需工場であったことから、不明の内に収束した。



新居の関所跡

水俣病の場合は、水俣湾の魚介類が原因だろうと分った時点では、中毒の原因たる物質が何か分らない、不知火海の魚のどれが汚染されているか分らないなどと言ひ募り、国も県も何もせず、被害を拡大させてしまったのである。(H)

熊本学園大学水俣学研究センター ブックレットNo. 8 発刊のお知らせ



「失敗の教訓を活かす～持続可能な水俣・芦北地域の再構築～」

宮北隆志著
2010年5月1日
熊本日日新聞社

全国巡回資料展 報告書
「新日窒労働組合60年の軌跡」

井上ゆかり編
2010年3月1日



私立大学「戦略的研究基盤形成 支援事業」に採択

水俣学研究センターが昨年度まで採択されていた「オープン・リサーチ・センター」事業が終了したのをうけ、本年2月に申請していた私立大学「戦略的研究基盤形成支援事業」に採択されました。

期間：2010（平成22）年度～2014（平成26）年度
研究代表者：花田昌宣

申請事業費総額（5年間）：1億6,030万円
研究プロジェクトに係る研究者数

：27名（うち学内17名、学外10名）

詳細は次号

水俣学研究センター日録

1月

- 5日 水俣市小水力可能性調査検討委員会：宮北
- 6日 第8期水俣学講義12回目：宮北
- 8日 新日窒労組資料水俣展オープニング
- 8～21日 新日窒労組資料水俣展
- 9～10日 第5回水俣病事件研究交流集会（水俣）
- 10～11日 一斉検診：原田
- 13日 第8期水俣学講義13回目
- 13～15日 新日窒労組OB・家族の作品展（水俣）
- 16日 新日窒労組資料展記念講演会「会社国家・日本の病根—水俣病が問いかけたもの—」佐高信氏（水俣）
- 19日 健康・医療・福祉相談：原田（水俣）
- 26日 第13回ゼロ・ウェイスト円卓会議：宮北・藤本（水俣）
- 30日 原田講演「水俣にかかわって50年」（水俣市立水俣病資料館「胎児性のことが気がかり」シンポジウム）
胎児性世代の被害に関するWG（大学）

2月

- 1日 胎児性世代の被害に関するWG（大学）
- 6・8日 原田講義ビデオ集録（慶応大学高草木教授）
第14回ゼロ・ウェイスト円卓会議：宮北・藤本（水俣）
- 13～14日 藤本ゼミ水俣研修（水俣）

- 16日 健康・医療・福祉相談：原田（水俣）
- 18～19日 御所浦調査：田尻・井上
- 19日 胎児性世代の被害に関するWG（水俣）
- 23日 健康・医療・福祉相談：原田・下地（水俣）
- 25日 京都学園大学研修受入れ：宮北（水俣）
チッソ分社化を問う連絡会講演：花田（水俣）

3月

- 1日 水俣・芦北地域戦略プラットフォーム第16回世話人会：宮北・藤本（水俣）
- 13日 胎児性水俣病シンポジウム：原田（水俣）
- 14日 胎児性世代の被害に関するWG：花田、東、井上、田尻、川辺（水俣）
- 15日 カナダ調査事前打ち合わせ（大学）
- 16日 健康・福祉・医療相談：原田（水俣）
- 22～4月7日 カナダ先住民水銀汚染調査：原田、花田、井上、田尻（井上・田尻 4月1日まで）
- 23日 第15回ゼロ・ウェイスト円卓会議：宮北・藤本（水俣）

編集後記

5月1日、総理大臣・環境省大臣・チッソ会長が水俣の地を訪れ「祈りの言葉」を述べた。「謝るだけなら猿でもできる」そんな言葉を思い出した。（M・T）



水俣学通信

第20号 2010.6.1

編集／熊本学園大学水俣学研究センター 発行人／花田 昌宣
連絡先／〒862-8680 熊本市大江2-5-1 熊本学園大学水俣学研究センター
Tel：096-364-8913（ダイヤルイン） Fax：096-364-8913
http://www3.kumagaku.ac.jp/minamata/ E-mail:minamata@kumagaku.ac.jp
印刷／ホープ印刷株式会社